

## 書評

## 十三万語の中国語辞典

愛知大学編『中日大辞典』

日本で、北京語を中心とする中国語を研究・教育しだしたのは、明治九年からである。明治時代の中国語教育は、まる暗記式であったためか、辞書らしい辞書が出るようになったのは大正からである。よく使われたものをあげると、(A) 石山福治『支那語大辞彙』(一九一四)(B) 井上翠『井上支那語辞典』(一九二八)(C) 宮島吉敏・矢野藤助『ポケット中国語辞典』(一九四五)(D) 旺文社『華日大辞典』(一九五〇)(E) 鐘ヶ江信光『中国語辞典』(一九六〇)(F) 香坂順一・太田辰夫『現代中国語辞典』(一九六三)(G) 倉石武四郎『岩波中国語辞典』(一九六三)などである。それにこんど愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』が出た。『中日大辞典』は上海の東亜同文書院で一九三三年に全学の教授によってはじめられ、敗戦のさい、十四万枚のカード(七く八万語)は敵産として接収された。

## 数奇ないきさつ

一九五三年、愛知大学学長(元東亜同文書院大学学長)本間喜一氏は、辞典の完成をねがい、中国科学院長郭沫若氏にカードの返還を願ひ出たところ、郭氏のあっせん、四年、引揚船興安丸に託して、おくりとどけられた。

愛知大学では、さいしょから編集委員であった鈴木沢郎氏を中心に一〇人にちかい委員をつくり、一九六一年を完成目標として編集をつづけてきたが、中国の文字改革の進展につれて、簡体字(略字)の制定、拼音 pinyin という中国公定のローマ字の出現、それに日本・中国の中国語研究の発展などにつれ、これらを全面的にとりいれるため、大きく手なおしをする必要にせまられた。それがため、六一年完成の予定が、とうとう本年二月まで延びのびになった。かねて予告を知っていた読者からいえば「千呼万喚はじめて出て来れり！」というところであろう。

中国語辞典の編成は二種類にわけられる。ひとつは発音によるもの(いまのところはGだけ)。もうひとつは、漢字の親字をひき、その字をかしらにもつ語彙をひくようにしたもので、『中日大辞典』は後者である。

漢字の親字は簡体字(げんざい常用)、繁体字(もとの複雑な字)、異体字(いまは使用されなくなった字)をならべてあるから、その数一万一千余字もある。異体字までいれてあるのはほかにないから、文献をよむためには、たいへん重宝である。語彙は政治・科学用語から、方言・成語・諺・古語におよび、十三万余があつめられている。

ほかの辞典には収録語数がかいてない(どの辞典でも、それを正確に記すべきだとおも

う)ので、一〇〇ページ、二〇〇ページ……の語数の平均を出し、ページ数にかけてみた。すると(E)はおよそ六万余語、(G)はおよそ五万余語と出た。(D)は大辞典とあるけれども、およそ八万未満である。「三宝」だの「三鞭酒」(シヤンペン)のように「三」のついた語彙が、どのくらいあるかとおもい、各辞典をしらべてみると、(A)は七一語、(B)は九五語、(C)は一二三語、(D)は二〇二語、(E)は二二三語、(F)は九三語、(G)は五六語、そして『中日大辞典』は四八〇語である。げんざいのところ、最も多くあつめられている。

#### 読者に親切な編集

どうしてこんなに格段の差があるかといえば、「三大紀律」だの「三査」(思想・工作・指導をしらべる)だの「三結合」(幹部と労働者と大衆との結合)といったような政治用語が、新中国では次々に出てくる。この辞典は、それらを念入りにあつめているからである。このような語彙は、あまりに多くて、専門家でもつい内容を忘れがちであるから、これは誰にもよるこぼれよう。なお、今後中国ではたえずこのような新語が出るにちがいないから、年に一度ぐらい、この辞典の補遺のパンフレットを発行してもらいたいとおもう。わたしは、読者(使用者)として希望する、つぎのことが、この辞典では、どうなっているかに興味をもっていた。

(一) 中国語では、一枚の紙を「一張紙」といい、一つの爆弾を「一枚」(または一顆)炸弾」というように、数につけた量詞(助数詞)が日本とちがうのが多い。だから、名詞には、その語につく量詞を示してもらいたい、というのが、わたしのねがいであった。これまでの辞書には、そうした親切がなかったが、この辞書で、はじめてそれがおこなわれている。そのうえ、二百余种の主要量詞を付録してあつて、便利である。

(二) 語学の習得には、反対語を、いっしょにおぼえると便利だ。これも辞書にかいてあるとよい。この辞書はそれを示してあると、凡例でうたつてある。なるほど、多と少、好(よい)と壞(わるい)、進と退などはある。ところが、出と進(はいる)、上と下、左と右、新と旧などは、でていない。わかつているだろう、というのかもしれないが、発音も日本とはちがうのだし、書いておいてもらいたかった。

斯大林(スターリン)、赫魯曉夫(フルシチョフ)があるからには、コスイギン、ジョンソン、ホー・チ・ミンなどもほしかった。中国の新聞には、毎日のようにでるのだから。辞書は買ったなら一生つかいたい。だから、堅牢で美しいことが望ましい。本書は、両方の条件をそなえている。とくに隷書の題字がうつくしい。(B6判 本文一九四七ページ 三五〇〇円 大安)

《早大教授・さねとう けいしゅう》

〔注〕朝日ジャーナル一九六八年三月十七日所載。

## 書評

## 「中日大辞典」の完成

愛知大学で努力をつづけていた「中日大辞典」(発売は株式会社・大安から、三、五〇〇円)が完成した。昭和六年に上海東亜同文書院で企画がたてられてから三十七年ぶりである。

この辞典の資料カードは、終戦の時にすでに十四万枚に達していた。しかし、敗戦の結果、そのカードは中国側に接収されてしまった。その後、中国科学院長・郭沫若氏のはからいで全部のカードが返還され、昭和三十年四月から編さん業務が再開された。

ところが、中国自体の変化や文字改革、それに日本の当用漢字、新カナなどの関係で、原稿の書直しも非常に多く、さらに最近の文化大革命による新語の続出もあって、編集、印刷には大変な苦勞がつづけられ、校正も五校でなお赤字がはいるほどだったという。

こうして出来上がった中日大辞典は、B 6、本文一九四七<sup>頁</sup>、検字表八五<sup>頁</sup>、日本語による索引六八<sup>頁</sup>、その他付録など合計二一四四<sup>頁</sup>の大冊になった。親字は簡化字二二三八字を含めて七八七六字、ほかに繁体字・異体字三三二七字をも併載してある。語数は約十二万語で、従来日本にある中国語辞典の二倍であり、とくに日本語による一万七千語の索引がついていることは、日中辞典を兼ねたものとして、利用価値が非常に大きい。

この辞典の出版によって、日本は中国語に関しては、世界の学界に誇りうる金字塔を建てた、といっても過言ではあるまい。

〔注〕毎日新聞 一九六八年三月三日「出版展望」所載。

## 《中日大辞典》の刊行を祝して

太田辰夫

語彙 13 万、B6 版 2100 頁に蠅頭の文字でぎっしり詰まった、本格的な中国語辞典が、ようやく発刊された。これだけの辞典は、わが国で最初のものであるばかりでなく、世界でも最初のものであるといっても、決していいすぎではない。おめでたい。なんとしても、おめでたい。それにしても東亜同文書院時代から今日にいたるまで、30 余年におよぶ関係者一同のご苦労は、筆舌につくせぬものがあつたであろうと、推察される。

この辞典をめぐる話題が新聞紙上などにあらわれたのは、もう十数年もまえのことであつた。それゆえ、いやしくも中国語に関心をもつものはだれでも、それこそ、首を長くして、本書の出版を期待していたであろう。編集に関係あるかたの謙虚な言葉は別として、一般は、ジャーナリズムが書きたてるから、どえらい辞典が出るそうだと、これで中国語も楽に読めるようになるだろう、という漠然とした期待をもつたのではあるまいか。わたくし自身の関心は、尋常一様のもではなかつた。むろん編さんの過程で、カードや原稿などを見たわけではないから、内容についての推測は漠然たらざるを得なかつたけれども、わたくしの関心の持ちようは、一般の人々とは異なつた、おそらくわたくし独特のものであつたといえるであろう。

昭和初期でやや信用のできる中国語辞典といえば井上翠のものぐらいで、石山福治の大辞典もあつたが、いたずらにぼう大なだけであまり役には立たなかつた。そのころ、わたくしは北京語を深く学ぶことを志していたがこれらの辞典では解決できない語が多いのに驚き、いくつかの本を中国人に読んでもらうこととした。その中の一つが同文書院の教科書《華語萃編》四巻である。この教科書を日本人向きとしては程度が高すぎるようであるが、わたくしはその中から、辞典に収められていない語を多数、学ぶことができた。なお同文書院では《華語月刊》という学習雑誌を発行し 119 号（昭和 18 年 11 月）まで続いたがこれには北京人教師の書いた流麗な文章が多くせられており、その注釈とともに、北京語学習の好い参考となつた。わたくしはこれを講読して、多くの語彙を集めることができた。当時、国内にもこのような雑誌があつたが取るに足りなかつた。また大連には中谷鹿二の《善鄰》という雑誌があつたが、これには《華語月刊》からの無断借用が目立つた。辞典未収の北京語を記したわたくしのノートは、《華語萃編》と《華語月刊》によって大幅に充実した。

終戦前にこのような方法で語彙を収集していたわたくしが、終戦後、十年近くたって、あの「日華辞典の原稿返る」という記事を見たときから、今年 2 月にいよいよ発刊となるまで、どれほどの期待と関心を、この辞典に持ちつづけていたかは、ご想像にまかせよう。わたしの関心は次の二点に要約できた。その一は、北京語をどの程度まで記録し得た

かということ、その二は、北京語以外のものについてはどうであろうか、ということである。

第一の点、すなわち北京語語彙はきわめて豊富に収められており、解釈は詳しく用例も多くあげられ、従来の辞典はどうていたち打ちできない。もともと北京語とはいっても、ここでは現代（主として民国時代）のものを指す。民国期の北京語の記録としては、この辞典は完璧に近い。これは、この辞典の原カードが、解放前に、多くの北京人の協力によって作られたという事実によって、決定づけられているようである。しかしながら、逆にわたくしのノートと対照すると、なお漏れたものが少なくない。試みにノート「小」のところを対照してみると、この辞典未収の語に「小兵」「小根儿」「小櫃儿」「小歡龍儿」「小可憐儿」「小礼帽」「小麻雀」「小毛羔」「小毛驢」「小廟子鬼」「小屏儿」「小取」「小燒」「小攤儿」「小鷹爪」がある、これらの語の多くは《華語月刊》の語積に見え、一部は《華語萃編》にもある。もちろん、これらが収められていなければならないというものではなく、「掛万漏一」なのであって、このためにこの辞典の価値が 1 ミリも低くなるわけではない。次に児化がノートに合致しないものが若干ある。例えば、この辞典では「小叶茶」とあるがこれは「小叶儿茶」がよいのではるまいか。そして反対語としての「大叶子茶」の注記が落ちている。もともと茶をこのようにいうのは北京語ではないと教えてくれた北京人もあった。次に解釈が不十分あるいは不適当な疑いのあるものとして「小綢子」「小鋪儿」「小市儿」などがある。「小綢子」はこの辞典では“ごく薄い粗末な絹織物”とあるのは奇異に感じた。この「小」とは「小幅」のことだと、わたくしは中国人から教わった。そしてその反対語として「大緞子」をあげられ、これは広幅で 2 尺 2 寸ぐらいあると説明してくれた。「小鋪儿」「小市儿」もこの辞典の訳は字面をなでただけで、もうひとつ適当ではない。しかしこのようなことはこの辞典では例外なのであって、大部分については、まことに適切な、あるいは親切でいいいな、場合によっては煩雑ともいえそうな、解釈が付されている。要するに、中国語の辞典は従来も北京語が中心であったが本書はこの点にいつそう重点をおいたものと考えられる。

次に第二の点、すなわち北京語以外について簡単に考えてみたい。中国語の辞典は、文言語彙には重点をおかないのが通例であり、他に漢和字典の類が、併行して用いられている。本書の方針は明示されていないが、文言中の比較的浅近なもの、すなわち現代文にも時として用いられるようなものに限定しているのではあるまいか。次に古白話は漢和辞典には収めないもので、中国語の大辞典には必要である。本書では、この一斑を収めるにとどめ、語数は多くない。いま試みに「阿」の項をみると、古白話とはいいいながらまた方言でも用いるものが多く、純然たる古白話は「阿屠」と「阿者」だけである。ところでこの「阿屠」は「阿堵」の誤で、文字ばかりでなく発音までも誤っている。「阿者」は《拜月亭》を引用して“発語の詞”とするが、最も手近かなところでは朱居易の《元劇俗語方言例釈》でも調べればこのような誤は犯さなかつたはずである。「阿者」は女真語で“母親”の意、《元人雜劇全集》とか《関漢卿戯曲選》とか、とにかく《拜月亭》を収めているものには

たい注記がある。満州語にもあり、北京の同様などには「阿家」「阿姐」などと当て字を用いた例がある。古白話は専門辞書に譲る（《大安》本年 2 月号、《中日大辞典》出版にあたって）と声明されていることだし、詳しくは論じないが、疑問に思うことが少なくない。方言については、普通話化しつつあるもの及び文章に見えるものを採るという原則は、妥当である。《漢語方言詞彙》を中心としたらしいが、この方針も承認されよう。ところが北京語と字面を同じくするものについていえば、案外、見過ごしてしまったものが多い。例えば「人」は長江流域などでは“からだ”“からだのぐあい”という意味に使い、巴金などのものにも見える。趙元任の《鍾祥方言記》などに記録されている。「随便」というのは「無論」「不管」の意で、「随便什麼時候…」などというのは、普通話化しつつあるといってもよいのではないか。すくなくとも文章には常用する。このような常用語が収められていない。「説話」に“はなし”という意味があることはこの辞典にもあるが、《国語辞典》そのまま《朱子全書》を引く。しかし「説話」を“はなし”“ことば”の意味に使うのは巴金にも見えるし、江成の《北方話江南話語辭辨異》にも指摘がある。「肚皮」に“腹”とあるのはよいが、これを転用とするのは不相当かと思われる。転用とは「肺肝」を“真情”に用いるようなものに限定すべきで、“腹”の場合は方言と注するが正しい。

人名は若干、収められている。試みに二三を引いてみると、毛沢東・劉少奇はともに収められ、孫文・魯迅は無視されてしまった。「岳墳」「岳廟」はありながら岳飛の説明はない。この辞典の特色として、小説などの登場人物をいくらか収めたことである。これは、歇後語などを理解するのに必要なためらしいが、充実する必要がある。武松とか魯智深とか林黛玉とかいうのは、歴史上の人物以上に人民の脳裏に焼きつけられている。「維特」「ウエルテル」（ゲーテ、若きウエルテルの悩み）など外国作品中のものについても考慮を要する。

成語・ことわざ・歇後語の類はよく収められている。これらはすべて、普通の語彙の間に割りこませてあるが、このほうが引きやすくてよい。

近年流行の特殊名詞やスローガンのたぐいも、最近のものは別として、かなりよく収録されているようだ。これらは社会の動きを鋭敏に反映するものであるから、欲をいえば、それが盛んに用いられるようになった契機や時期を併記すべきである。わが国では、例えば“ヤミ”は昭和 14 年から、“斜陽族”は、23 年から流行したということがわかる本がある。

この辞典の語彙収録の方針の重要な特徴は日本語と漢字面で一致し、意味は同じかあるいは類似しているものも、収めるという点にある。完全に同じであるなら実際に辞書を引くことはないであろうが、それでも「行書」の「行」は xing か hang か、「品行」の「行」は 2 声か 4 声か、調べたい人もあろう。まして意味の間に距離のあるもの、あるいは似て非なるものは、看過されやすいだけに、かえって重要である。字面は同じでもすべて収録するという方針を最初に採用したのは岩波の辞典であるが、どちらも検討が行届いていない。例えば「散文」に“隨筆”という訳を与えたのは光生館の増訂版だけで、両書とも《漢

語辞典》の解釈を墨守している。《中国新文学大系》に《散文一集》というのがあるのをご存じないのだろうか。最近、話題となった「信仰」という語も、この語の振幅に感付いたのは光生館増訂版だけで（ただしなお適訳を与えていないのも申し訳ない）、両書とも日本語に全く同じとしている。「古代」「近代」「現代」「当代」というにしても、具体的な説明が必要である。単にそのまま日本語に同じとするのでは解釈にならない。この辞典では料理は菓子の作り方や特殊な物品について、微に入り細を穿って説く。例えば「五毒餅」は7行、「薩其馬」は6行、「五鬼判闘儿」という花火は7行、「焙窠」というワラ製の保温器は7行を費して説く。むろん、このように記録しておくのも悪くはないが、このような知識が実用上どのくらい役に立つかは疑わしい。この辞典の処々から後向きの姿勢を感ずるのは、わたしの誤解であろうか。

そこで最後に現代の普通話で、この辞典でどの程度、解決できるか試してみよう。使用したのは大安版《中国語中級上級読本》で、原書は《小学語文朗読文選》といい、小学の国語の教科書からの抜粋である。その21頁まで、しかも本文のみを対象としたから、量的には僅少なものである。そこに見える語でこの辞典未収の語には次のようなものがある（原書に出てくる順）。

牢底 坐穿 囚歌 活棺材 毒刑 王朝 飛行軍 綠漣漣 湖霸  
 烏蓬船 漁歎 魚簍 漁船 漁民 說不完 浪濤 鉄枷 摸桩（原書  
 に注あり） 白匪 嚴禁 英雄郎 一条心 鉄牆 記工員 今晚上  
 撥亮 比得上 洗補 忘懷 五次战役（原書に注あり） 敵機 打糕  
 炮火 硝烟 流下 狙撃戦 昏倒 背進 炸平 你說 唱不起来  
 敵占区 首長 混進 敵戦区 志願軍 山路 双拐 金達萊花 開滿  
 山野 前沿 減低

以上の中には結合のしかたがなお不安定で、見方によっては辞典に収めるには及ばないと思われるものもいくらか含まれている。しかしこの辞典の採詞の範囲から見ると、これらは当然、収めるべきであろうと思われる。その中でも、「白匪」「一条心」「記工員」「忘懷」「首長」「双拐」などは、小型の辞典にも欠くべからざるものではあるまいか。ついでながら「金達萊花」はつつじの花（朝鮮語）、「前沿」は最前線（《歐陽海之歌》にもある）のことである。

次に語彙としてはこの辞典に出ているが、解釈が不十分なものを記す。

打翻 免除 湖水 天網 阻擋 眼光 溫暖 傷員 狼狠地  
 架（架着双拐） 野菜（挖野菜） 走路 造成 偵察員

例えば「眼光」はこの辞典では①眼光、見識。②目のつけどころ、眼識、着眼。③意誌趣味。とあるが、実際に多く見えるものは“視線”“まなざし”の意である。「野菜」はこの辞典では“野生の菜（な）”とある。菜（な）を掘るのだろうか。「免除」は“免除する”とある。“免除する”という日本語は“授業料を免除する”というように用いるが中国語では、“まぬかれしめる”“除く”のような意味。「偵察員」は“刑事”とあるが、“斥候”のこ

とらしい。

話がこまかくなつたが、要するに現代の普通話に関しては、このような最新の大辞典でも非常に不十分であるということが、おわかりとおもう。

およそ辞典の性格を決定するものは、なによりもまず、語彙選択の方針である。この辞典には、これが述べられていず、わずかに前述《大安》2月号や広告などから、これを推測するに過ぎない。中国語の語彙は無限である。もし範囲を限り、重点を定めなければ、どのような大辞典でも、収めきれものではない。ある古書（白話ではない）を訳した人が、《大漢和辞典》に出ていない語が余りにも多いと嘆息していた。全13巻を以てしても、なおかつそのようであるから、この程度の大辞典で収録もれの語が多いのは、むしろ当然である。

以上、この辞典の語彙収録の範囲について考えてみた。結論的には、この辞典が最も重点をおいているのは、民国期の北京語であるということがわかった。さて次には、文字・注音・解釈・用例その他、記述の具体相を考察しなければならない。しかし、もはや紙数もかなり超過したので、すべて後日の機会に譲りたいと思う。

本書は紙数を制約せず、必要なことはどれほど紙面を費してものせるという、ぜいたくな辞書のようなものである。それだけに世人の期待も大きいであろうし、わたくしの点もからくなった。「吹毛求疵」の意図は決してない。以上に指摘したようなことは、白玉の微瑕なのである。記述が詳しく、読んで楽しくなる辞典、博識な中国人のおしゃべりを聞いているような辞典である。ひとりでも多くの人にこの楽しみをわけていたため発刊を祝し、あえて紹介の筆を執った。最後に辞典編纂処はじめ関係者一同の長年にわたるご苦勞を心からねぎらう次第である。

---

〔注〕「大安」1968年6月号所載。



Hamburg , September 11 , 1971

Dear Professor Suzuki ,

On July 21,1971 I sent you a letter in which I confirmed that I received with many thanks two copies of the second edition of your dictionary. To-day I am glad to send you a separatum of the review I wrote on the Chu-Nichi Daijiten. The article will appear in this years' edition of the journal "Oriens Extremus" which is being published by the Chinese and Japanese Institutes Hamburg University.

With the very best wishes I am

Yours truly,

W.lippert

---

[注] Wolfgang Lippert ハンブルグ大学教授による同大学中国日本研究所  
発行の "Oriens Extremus" に中日大辞典の詳しい書評を掲載した。

## Besprechungen ostasiatischer Neuerscheinungen

Chu-Nichi daijiten. Kompiliert vom Redaktionsstab für das Chu-Nichi dai-jiten der Aichi-Universität<sup>i</sup>, Toyohashi, Präfektur Aichi, Aktiengesellschaft Daian, Tokyo 1968, 2135 Seiten, Yen 3500, —.

Läßt man einmal die Wörterbücher Revue passieren, die dem chinakundlich Interessierten zur Erschließung der modernen chinesischen Sprache zur Verfügung stehen, so zeigt sich rasch, daß darunter nur wenige Werke zu finden sind, denen man den Rang eines wirklich brauchbaren Nachschlagewerkes für das Chinesisch der Gegenwart zuerkennen kann. Unter den in der Nachkriegszeit erschienenen Werken dieser Art sind vor allem zu nennen das Chinesisch-Russische Wörterbuch von I.M.OSANIN(3.Aufl.1959), in dem zwar auch der Wortbestand der chinesischen Schriftsprache in gewissem Maße berücksichtigt ist, der Nachdruck aber auf der Erfassung der chinesischen Gegenwartssprache liegt, sowie das 1959 von der Deutschen Abteilung des Pekinger Fremdspracheninstituts herausgegebene Chinesisch-Deutsche Wörterbuch (Han-Te tz'u-tien). Die in den USA herausgebrachte englische Fassung dieses Wörterbuchs ist das Chinese-English Dictionary . . . of Modern Communist Chinese Usage, das in der Reihe der Veröffentlichungen des Joint Publication Research Service erschien und das gegenüber dem Han-Te tz'u-tien den Vorzug hat, daß die sehr zahlreichen sprachlichen Mängel der deutschen Worterklärungen im letzteren in der englischen Übersetzung bereingt sind.

Begrenzter in Intention und Umfang sind solche Wörterbücher wie das *Chinese-English Current Political Phrases and Terms Dictionary*, verfaßt von der Kaderschule für Ausbildung in Fremdsprachen der Nachrichtenagentur Hsin-hua, Peking 1964, das *Dictionary of Chinese Current Terminology*, das unter der Leitung von Albert A. DIEN im East-West-Center der University of Hawaii abgefaßt wurde und 1962 erschien, sowie das *Dictionary of Spoken Chinese* des Institute of Far Eastern Languages, Yale University<sup>ii</sup>, um nur einige zu nennen.

Auch die im Anfang der 60er Jahre in Japan erschienenen Nachschlagewerke für das moderne Chinesisch — es seien erwähnt die Wörterbücher von KOSAKA und TADA (Gendai Chu-Nichi jiten), KANEGA, N.(Chugokugo jiten), das phonetische Wörterbuch von KURAIISHI, T (Iwanami Chugokugo Jiten)<sup>iii</sup> sind zwar zum Teil

umfangreicher als die genannten chinesisch-westlichen Werke, verdienen aber als Hilfsmittel zur Lektüre neuchinesischer Texte noch längst nicht das Prädikat „ausreichend“.

Von allen diesen chinesisch-fremdsprachigen Wörterbüchern kann sich keines mit solchen umfassenden Nachschlagewerken messen, wie sie für eine andere fernöstliche Sprache, das Japanische, vorliegen. Werke wie

Wolfgang Lippert (Hamburg)

---

i 中日大辞典。愛知大学中日大辞典編纂処編

ii Siehe die Besprechung von Klaus KADEN in *OLZ* 64. Jahrgang 1969, Nr. 7/8, S. 394/395.

iii S. die Besprechung von Wolfgang FRANKE *OE* 12, 1965, S. 255/256.

## 書評

愛知大学中日大辞典編纂処編（1968）、『中日大辞典』（大安、東京）—これまで日本語で出たもっとも広範な辞典。語彙の選択には少し首をかしげるようなところもあるが、原資料から採録しているので、他人の辞典をひきうつしにした辞典にない確かさをもっている。1986年に、大修館書店から新版が出た。

---

[注] 「言語学大辞典」第2巻 世界言語編 三省堂（1989年） 「中国語」の項で、日本で出版された中国語の二言語対照辞典中、今日の用にたえるものとして唯一「中日大辞典」が挙げられている（執筆者 橋本萬太郎）